
ストライクウィッチーズ 奇跡の交差

睦城矢刺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 奇跡の交差

【Nコード】

N4954Y

【作者名】

睦城矢刺

【あらすじ】

その名の如く、本来は交わる事など決していない平行世界。しかし、もし2つの世界が交差する事があればそれは、まさしく奇跡。そしてその奇跡はいったい、2つの世界にどんの影響を及ぼすのか、誰もわからない。だがそれでも、彼等は、そして彼女等は戦い続ける。2つの世界を守る為に

架空戦記『ストライクウィッチーズ』と異世界の戦士（軍人）達との奇跡のコラボ作品です。それではどうぞ！！

序（前書き）

新しく書き始めた筆者の妄想、もとい新作です。プロローグには長い下々多いので、誤字脱字も多いかもしれませんが、どうか楽しんでください！

序

平行世界は、決して交わることはない。

その名の通り、お互いを平行戦場に進むからだ。

しかし、もしその定理が崩れ、交わる様な事はあるのか？

もしあるとすればそれは、何億、何十億、何百億分の一という、まさしく『奇跡』と言っても過言ではない事だ。

これはそんな『奇跡』の一つなのかもしれない

ストライクウィッチ

イズ 奇跡の交差

? Side

寒風吹きすさむ12月の初め。

暗い雲が敷き詰められた夕方の空が、電飾をともした木々が並び、クリスマスソングが絶え間なく流れ、多くの人々が忙しなく動き回る街の上にグッタリとのしかかり、何とも言えない息苦しさを感じる。

そんな暗く、鉛色に染まったの空を、2つの『刃』が、轟音と共に切り裂いていく。

片方を前に、片方を後にして、真っ直ぐに延びる白煙と獣の唸り声の様な轟音と共に空を行くソレからは猛禽の様な程の猛々しさを感ずる。

こちら隊長機、あと5分でポイントの空域だ。気を引き締めていけ

後に行くF-15J戦闘機、通称『イーグル』に乗り込んでいる俺こと、日本国防空軍第205飛行隊所属、シンザキカスト臣崎和人二等空尉は、俺の先頭に行く飛行隊長の東間『アズマ』三等空佐からの無線連絡に耳を傾けていた。

了解しました

俺は隊長からの無線連絡に簡単な返事だけを返す。正直、あまり長話出来るような余裕はなかったからだ。空軍の戦闘機乗りを目指す、航空学生課程に入って早8年、自分の身に初めてかかったスクランブルの命令。緊張するなと言う方が無理だ。

そう固くなるなよ、臣崎

緊張している事がバレたのか、隊長から再び無線が入る。

気楽にいけよ、気楽に

そんなこと言われたって、自分は体調みたいに場馴れしているわけじゃないんですよ

方や、国防空軍の前身たる航空自衛隊時代からの実戦経験を持ち、28歳という異例の若さで三佐に昇進したベテランファイター。方や、士官になって2年目、しかも実戦経験全くなしの新米ファイター。比べる事すらバカらしくなってくる組み合わせである。

俺はそんなんじゃないやねえよ。それに、そんなネガティブ思考じゃアツという間にやられちまうぞ

不吉なこと言わないで下さいよ

ハハツ、すまんすまん。ちょっとした冗談だ

冗談つて、この状況で言われるともものすごい不安になるのでシャレになりませんよ。マジで。

そんなコントじみた会話をしていると、気が付けばもう市街地を抜けて冬の凍てつく海の上を飛んでいた。備え付けのレーダーを見ると今回のスクランブルの原因となった『敵』の反応がモニターされている。接触まであと2分といったところか。

成田基地に駐屯する第205飛行隊がスクランブル命令を受けたのは殆どの兵士が帰り支度を始める17時頃のことだった。空軍のレーダーが日本領空内に現れた『謎の飛行物体』を見つけたのが始まりだった。

太平洋に突如として現れた『ソレ』は一切の無線による領空からの退去命令を無視、その上、空軍が飛ばした偵察機を撃墜し関東方面に向かって飛んでいるとのことだった。

国防省は偵察機撃墜の事を知った後に、この飛行物体を『領空侵犯したうえに友軍機を撃墜した敵』として空軍に拿捕、もしくは撃墜を命令した。俺達が受けたスクランブルもソレだ。

そんなわけで俺達がこうして飛んでいる訳だけど、今回のスクラ

ンブルでは俺が新米であること以外にも不安要素がある。

それは、『飛行物体』の正体が依然として不明である事だ。

撃墜された偵察機からの映像が、何の理由か全く無かったのだ。

普通それだけならカメラの故障という事だけで納得がいくが、もう一つ、不安要素がある。それは偵察機を撃墜したのはレーザーらしきものであるという事だ。

これは撃墜された偵察機のパイロットからの最後の通信でわかった事なのだが、レーザー兵器などまだこの国も保有しておらず、基礎すら形になっていない。ゆえに、今俺達が接触しようとしている相手は『未知のレーザー技術を持った謎の飛行物体』という事になり、現場にいる俺達としては不安で仕方がない。現に隊長も、『敵』の正体が不明であり、何の情報もないという事を司令から聞いた時にはつきりと顔をこわばらせたほどだ。

見えたぞ

不意に、隊長から真剣な声で『敵』との接触を知らせる無線通信が入る。俺は『敵』との接触到に身体が震えだす。『死ぬかもしれない』という恐怖心が身体の奥からどんどん湧きあがってくる。そして俺はバイザー越しに、雲の切れ目からスウツと現れた『敵』の姿を見て、息をのんだ。

「……………な、なんだよ。アレ」

声が震えているのが自分でもわかる。それほどまでに『敵』の姿は異様過ぎた。今頃は体調も、ライトニングに備え付けられたカメラ越しに状況を傍観している軍幹部達もおそらく同じ反応を示すだろう。

ステルス爆撃機のような三角形の形。黒く染まった機体^{カラダ}。パズルのような六角形の斑点。

空を飛ぶには必要不可欠な推進気もプロペラもつけずに、まるで滑る様にして空を飛ぶ『敵』は、とても禍々しく、不気味だった。

序（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。ついでに、筆者が別に連載している『IS 日輪の乙女達』も、よろしければご覧になつたください。

それでは！

第一話（前書き）

たぶん週一の更新となると思いますが、まあ、気楽に更新を待っていて絵くください。更新しないなんてことはないのです。ぜひ見捨てないでください。

そんなこんなで第一話です。ではどうぞ!!

第一話

和人 Side

司令部からのスクランブル命令に従い『敵』のいる空域に赴いた俺達が見たのは、機械とも、生物とも見分けがつかない。正しくアンノウンとも言うべき異形の塊だった。

なんだありや……………？

隊長も、まるで未開のジャングルの奥地で珍種の生命体に会った探検家の様な又けた声を漏らす。

エイリアンの襲来かなにかかよ

確かにそう思えますけど、まだそう決まったわけじゃ……………

いやそうだけどさ……………、とりあえず旋回して様子を窺うぞ。迂闊に発砲するなよ

了解しました。旋回行動に移ります

隊長の後に続き『敵』の周りをゆっくりと旋回する。最初の内は何時攻撃が来るのかとビクついていたが『敵』は俺達に目もくれず真っ直ぐに日本本土に向かって飛び続けている。まるで俺達など眼中にないと言われているようで腹が立つが、大人しくしていてくれるのに越したことはない。上手くいけば拿捕出来るかもしれない。が、その考えは甘かった。

旋回が半周終わろうとした時、何の前触れもなく『敵』がビームを撃つて来たからだ！

「……………っ！」

俺は間一髪、操縦桿を前に倒してそれを避ける。急なGを受けながら、急降下して回避した直後、俺が居た場所を赤いビームが過ぎ去る。少しでも判断が遅ければ俺は今頃、機体もろともスクラップになって海の藻屑と化していただろう。

あつぶねえっ！

ヘルメットに接続された無線から隊長のうめき声が聞こえてくるが、俺は機体のバランスを安定させる事に精一杯で気にかける余裕がなかった。

『敵』からのビーム攻撃は続き、反撃どころか接近の際すら見せない。

クソッ、撤退だ！

りよ、了解！

命令に従い、操縦桿を操作して隊長の後を追う。

無数のビームを同時攻撃してくる、ステルス機以上に巨大な『敵』。二機の戦闘機ではとても対処しきれない。拿捕や撃墜なんて出来っこない。

エンジンをフルスロットルさせて空域より離脱する。『敵』は追撃しようとは向かってくるが足は速くないらしくどんどん距離を開いていく。やがて『敵』の攻撃の照準もどんどん疎らになってきた。

(助かった……………)

攻撃と死の恐怖から解放された反動で、両の肺の溜った重い空気を吐き出す。その時だった。

一瞬、前方の雲の切れ目から『黒い影』がチラツと見えた。

「な……………っ!」

『敵』だ! と本能的に直感して俺はすぐに僚機へ無線を入れる。

前方っ、『敵』の僚機らしき機影を確認! 数、1!

なにっ!?

その直後だった、先の『敵』よりもはるかに小さい 恐らくはセスナ並み 『敵』は、こちらとの距離を詰めながら全く同じビームを撃ってくる。

もう一機いたのかよっ!

隊長はそう吐き捨てながら主翼に付けられた90式空対空誘導弾短距離ミサイルを一発、新たに表れた『敵』に向かって撃つ。白煙と共に撃ち放たれたソレは、まるで吸い込まれるようにして『敵』に直撃する。白い、結晶の様な破片となって碎け散る『敵』を見て呆気なく感じたが、その思考は瞬間的に途切れる。

『敵』を撃墜した際に膨れ上がった黒煙、その中から一条のビームが、真っ直ぐと俺に向かつて放たれたからだ!

「……っ！」

迫りくる死の恐怖に俺は何もできない。体が硬直し、操縦桿を動かすことさえできない。そんな俺が今できるのは死の恐怖に耐える為に両目を固く閉じて歯を食いしばる事だけだった。

……！……っ！

無電越しで隊長が何か叫んでいるがよく聞こえなかった。そして俺は訳も分からずに死を覚悟する。

………痛みが来ない………死んだのか………？

死の痛みが何時まで経ってもやってこないのを不思議に感じ、恐る恐る目を開ける。

そこには本来、俺と機体をスクラップに変えるビームが視界いっぱいに広がっているはずだった。

しかしそこには、誰もがまるで想像もしなかったような光景が広がっていた。

「な……っ！？」

俺はのの光景に絶句した。

目を開けてまず目に付いたのは人の背中だった。

純白のセーラー服を着、グレーでカラーリングされた金属の筒の様なものを両足に履き、手に旧式の機関銃を持ち、何のふざけなのか、犬の耳と尻尾を付けた、とても幼い、人の背中だった。

俺はその光景が信じられなかった。パイロットスーツや酸素マス

クを着けずにこんな高度で人が活動できるなんてありえない。浮力だって、足に付けた見慣れない機械の先端に付いている、小さなプロペラのみだ。

そして何より信じられないのが、俺の命を奪うはずだったビームを防いだという事だった。

円形に広がる、青く光る盾の様なもの。この背中はそれを自分の目の前にかざしてビームを防いでいたのだ。

大丈夫ですか！？

ふと、隊長のモノでもない、まだ幼い少女の声が耳に入ってくる。無線に割り込んだのか、その声には弱冠ノイズがかかっていた。

「キミは……？」

この声が、自分の命を救った人の声であることを直感した俺は呻く様に声を出す。

少女は、俺の声に応えるようにして、こちらに振り向く。

薄茶色のクセのかかったショートヘアに、幼さを十分に残した顔つきは、小柄な体つきと相まって小動物の様な愛らしさがある。

だがその瞳からは、果ての無い、強い意志の様なものが感じられる。そんな彼女は、俺が無事であることを見るとニツコリと年相応の笑顔を浮かべ、国防海軍でしている様な敬礼を向けて言った。

わたしは宮藤芳佳^{ミヤフジヨシカ}。連合軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』所属のウィッチ。軍曹です！

そう言って彼女は、宮藤芳佳は自己紹介をした。本来ならここで俺も自己紹介をすべきなのかもしれないが、生憎と俺の脳はショー
ト寸前でそんな余裕なんてなかった。

ただ一つ言える事がある。それはこれが、俺と彼女の、奇跡の様な出会いとなつた事だった。

第一話（後書き）

どうでしたか？

我ながら最近病気なんじゃないかと思う様な内容ですが、それに表現も滅茶苦茶ですが！ まあ、その点は感想を書きついでにアドバースをください。

ではまた！！

第二話（前書き）

更新遅れてしまいました。先週学校の期末試験で書く暇がありませんでした。申し訳ありませんでした。

相変わらずの駄文ですが、楽しんでいってください。ではどうぞ
！！

第二話

和人 Side

『ウィッチ』、だと……？

ヘッドホン越しからの隊長の声が右から左へ抜けていく。俺の目の前にいる『ウィッチ』と名乗る少女、宮藤芳佳の存在に思考が停止していたからだ。

『ウィッチ』とは、西洋の魔女を示す英単語の事だが、そんなファンタジーな存在があるなんて到底信じられない。しかし現に今、彼女は両手にシールドを展開して俺を守った。レーザー兵器と同じく基礎すらも出来上がっていない代物で、だ。それに、生身の人間がこんな高度で、酸素マスクも耐Gスーツも着ていない軽装状態で活動できるのも、彼女が魔女だと信じ切ってしまうえば納得できる事だ。それに第一、『501』などという部隊は国防空軍どころか、陸軍や海軍の航空部隊には存在しない。彼女が持っている装備もそうで、足に履いている金属の長靴の様なモノや、手に軽々と持っている旧式の軽機関銃、そしてなにより、彼女の身体から生えている犬耳と尻尾は、時々ピクピクと動いて、どう見ても作りものとは思えない。

「君は一体……」

そう呟いた時だった。今まで沈黙していた『敵』が、俺と少女を掠める様にビームを撃って来た。

「危ね……っ!？」

意識を戦闘に戻された俺は上昇して回避する。隊長も同様に上昇

して回避するが、そこに先程の少女の姿はなかった。

「逃げ遅れたか!？」

シールドを展開できるとはいえ、あんな形で攻撃を食らっては反応しきれない。最悪の事態を想像し急いで彼女の姿を探した。

「……………いた」

必死に首を回して探していると、先程俺が居た場所に彼女はいた。傍目から見て無傷なのを見ると寸でのところでシールドを展開したか、かわしたのだろう。

しかし安堵の息を漏らしたのもつかの間、俺は少女の行動に絶句した。手に持った軽機関銃を構え、一直線に敵に突っ込んでいったからだ！

「馬鹿やめろっ！ 死ぬ気かっ!？」

俺はあまりの衝撃に無線越しに怒鳴った。しかし少女から返って来たのは、希望を感じられる、少女特有の明るい声だった。

「だいじょうぶです！ ウィッチに不可能はありません!！」

『敵』から放たれる無数のビームをかくくりながらも少女は手に持つ機関銃から、ダダダダッ、と音を立てて弾を連続して撃ち放ち、『敵』を粉碎する。。

「すげえ……………」

少女の手際の良さに俺は感嘆の息を漏らす。その動きは何度もあ

の『敵』と戦ってきた者のソレだ。

といっても、まだ安心はできないぞ臣崎

呆然としていた俺は隊長から又無線で『敵』がもう一体いるのを思い出した。機首を傾けると先よりも何倍も巨大な『敵』が間近に迫ってきているのが見える。

嬢ちゃん。君、あのバケモノの名前と具体的な弱点を知ってるのか？

不意に隊長が少女に対して質問する。少女は弱冠戸惑いながらも空に答える。

え、あ、はい。あれは『ネウロイ』というもので、体内に埋め込まれている『コア』を壊す事が出来れば倒せます。でも壊さない限りはいくら攻撃を加えても再生してしまうんです

成程ね。弱点が分つちまえば簡単な事か

隊長の声は、アドレナリンが出ているのか、それとも武者震いか、弾んでいるものの微かに震えてもいた。確かに、敵の弱点が分つてしまえばこちらが持つ恐怖心は軽くなるし、いくらでも反撃のしようがある。

行くぞ。 臣崎

了解！

命令に反する必要などなかった。一気にスロットルを全開にし、

隊長の後に続く様にして、『敵』の直上に行くように緩やかに上昇する。

ちょっと待ってください！ 危ないです！！

こちらが『敵』に仕掛けようとしているのが分つたのか、少女は悲痛な声で俺達を止めようとこちらに向かって飛んでくるが、最高マツハ2.5まで出せるF-15Jに対して、プロペラを使っているレジプロ の様なものが追いつける訳もなく、距離はどんどん開いていく。

ヤツの上で一気に降下して短距離ミサイルを撃ち込む。しっかりといてこいよ

わかりました！

隊長の言われた通り、ビームをかわしつつ上昇し一気に降下する。

「くっ……！」

急激にかかったGに耐えつつミサイルの発射ボタンに指を添える。敵との距離はどんどん縮み恐怖心から機首を上げないように両手に力を込める。

今だ、発射！

隊長の号令と共にボタンを押す。2機の主翼から切り離された短距離ミサイルは2条の白煙を引きながら『敵』に向かって進んでいく。俺達が機首を上げて再上昇し敵との衝突を避けた瞬間、後ろでドオンッ！ という耳を突くような強烈な爆音と振動が機体と身体

を揺らした。

やったぞ撃墜だ！

身体にかけたGと衝撃でしばし呆然としていた俺だが、隊長の喜々とした声で『敵』を撃墜した事を理解した。こつもあつさりと倒せると『敵』に異常なまでの恐怖心を抱いていた自分が馬鹿らしくなってくるな。ホントに。

「そう言えば、あの子は」

先程引き離れた少女の事が頭を過ぎり首を回して彼女を探す。が、そんなに慌てることはなかった。

不意に人が他の影がかかり斜め上を見ると先程の少女が防風用の窓ガラスをノックしていた。

あの〜 すいません

あ、はい

あまりにも唐突な事に間の抜けた返答をしてしまう。少女は俺を興味深そうにジッと見つめていた。少女の大きく、くりつとした瞳に見つめられ、俺はまるで金縛りにあつたように固まってしまふ。しばらくたつて少女は口を開く。

あなた方って扶桑人ですか？ 見たことない飛行機に乗ってますけど

は？ 扶桑人？ 俺達は日本人だぞ

え、でもその言葉ってどう考えても扶桑の言葉じゃ？ それに他の皆はどう？……

ちよつといいかなお2人さん？

訳のわからない押し問答をしていたところに隊長の声が割って入る。

嬢ちゃん、悪いが君にいろいろと聞きたい事がある。俺達と一緒に基地まで来てくれないか？

え？ でも私は……

悪いが俺達は嬢ちゃんに対して手荒な手段を使いたくないんだ。だから大人しく付いてきてくん無いか？ 決して悪い様にはしないから

隊長の判断は最もだろう。『敵』の撃墜を共闘したとはいえ、彼女が俺達の味方だと決まったわけではない。だが敵とも言い切れないこの状況では見逃すことは出来ないのだ。

……はい、分りました

少女は何か言いたげだったが了承してくれた。俺は了承してくれなかったときはどうしようかと不安だったが、ひとまず安心だ。

その後俺と隊長は謎の少女を左右から挟む形で基地に向かって飛んでいた。少女は今のところ何の抵抗も見せずに大人しくしていたが、市街の上空を飛び、基地が近くなつたところで少女に異変が起きた。

え、ウソッ……!?

どうした!?

ま、魔法力がもう……! !

見ると、少女が履いている機械のプロペラの回転が、丸で燃料切れ寸前のプロペラエンジンの世に弱くなっている。

まさか、燃料切れか!?

基地が近くなり、高度を下げ始めているとはいえ地上との差はとてつもない。この高さから生身の人間が落ちればどうなるのか、想像もしたくなかった。隊長も、焦った声を上げる。

まだ基地まで距離あるぞ! 何とかもたせろ!

そ、そんなこと言われたって! う、うわっ……! !

ああっ! !

願いもむなしく、プロペラの回転は弱まっていき、少女はハンググライダーのように失速し、情けない悲鳴を上げながら地上に落ちていった。

……

不気味な沈黙。サーツと顔から血の気が引いて行くのがやけにはつきりと分った。

……た、隊長……

……だ、大丈夫だろ……。あの落下速度なら、上手くすれば無事着陸できるさ。ハハハ……

笑いがやけに引きつっているのは追及しないでおう。

と、とにかくだ。今の俺たちじゃ何もできないから、一端基地に戻ろう。報告して、警察とかに応援を要請すればみつかると。……

……たぶん

そ、そうですね、大丈夫ですよ。……たぶん

……

アハハハハハハ……

俺は墜落していった少女が無事であることを祈りつつ基地へと向かった。

第二話（後書き）

今回でネウロイとの戦闘は終了です。次回からは和人と芳佳が出会うようです。墜落した芳佳がどうなったのかも楽しみにしてください。

ご意見・ご感想お待ちしております。ではまた！！

第三話（前書き）

更新が遅くなったすいません。とりあえずやる気はあるので暖かく見守っていただきます。だはどうぞー！

第三話

宮藤 Side

異変が起きたのはほんの数時間前でした。

私達、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズはいつも通り、アドリア海に現れたネウロイと戦っていました。

大型が一機、中型が三機、小型が五機と少ない数で三機の円盤型のネウロイが混ざっていた。

ミーナ隊長はそのネウロイが基地を、もしくはロマーニヤの街攻撃するための物かもしれないと言っていたし、頑張らないといけな
いよね。

そして挑んだネウロイとの戦い。坂本さんの指示の下で、そしてリーネちゃん達と戦ったおかげでネウロイの殆どを撃ち落とす事が出来た。

そんな中、円盤型の一つが攻撃をかいくぐって逃げ出すのが見えた。

「逃がさない！」

私はすぐにそのネウロイを撃ち落とす為に後を追った。

距離を詰めて、機関銃の引き金を引く。

何故か攻撃をしてこなかったそのネウロイを、私はあつという間に撃ち落とす事が出来た。

この時私は、ネウロイを撃ち落とす事が出来た事がうれしくて思わず気を抜いてしまっていた。だから、

あのネウロイが突然爆発したことに反応が遅れてしまった。

たぶん、ネウロイが持っていた爆弾が爆発してしまったんだろうけど、私はそんなことも考えられなかった。

爆風に巻き込まれて、耳のインカムから聞こえてくる皆の音が、とても遠く聞こえた。

和人 Side

腕に付けた安物のアナログ時計が丁度20時を示す頃。辺りはすっかり暗くなり冷たい風が吹きすさんでいる。基地近くにある官舎に住んでいる俺はそんな中を、風の流れに逆らいながら自転車をこいで自分の住処に向かっていった。ジャケットの上にマフラーを巻いてはいるが、12月の寒風はそんなことお構いなしに服の中に入り込んでくる。

「ふう……………」

官舎に着き、電灯の光で照らされた駐輪場に自転車を停めて星一つない都会の夜空を見上げて一息つく。

（あの子、どうしたのかな）

あの時、死ぬはずだった自分を助けてくれたあの少女の事を思い出す。期間途中で全量不足(?)で墜落して行った彼女は、俺達が基地に戻りこの事を報告した後すぐに捜索が始まった。『ウィッチ』と呼ばれる謎の存在に空軍上層部はだいぶ混乱しているようで、少

女の捜索には警務隊や基地警備隊、地元警察による大規模な捜索が行われているが未だに発見には至っていない。

俺も最初は捜索に加わっていたのだが、隊長から「後の事は俺がやるからお前は帰って休んどけ」と言われたので今こうしているわけなのだが、やはりあの少女、宮藤芳佳の事が頭から離れないのだ。

「無事だといいいけどな……………」

そんな事を呟きつつ鍵を開けて自分に割り当てられた部屋の中に入り電気をつけ、玄関を上がりマフラーをほどきながら明かりをつけた洋間に入る。

俺の生活空間であるとともに寝室でもあるこの部屋には、木目調のテレビ台に置かれた小さな液晶テレビと本棚などと共に、ソファ1代わりに使っているシングルベッドがある。

官舎としては狭い部類に入るのだろうけど、少し小さめのカウンターキッチンがある事も含めて、1人暮らしの俺にとっては困る事のない広さだ。

エアコンをつけて、背負っていたリュックサックを床の上に下ろしベッドの上に脱いだジャケットとマフラーを放り投げて早々に夕食の準備を始める為に台所に入る。準備といっても、昨日作ったカレーの残りをあつためるだけなのだが、カレーは一晚漬けておく旨くなるって言うし、これは断じて、断じて！夕飯作るのめんどくさいと思ったわけではないのだ。

……………たぶん……………。

「でも二日続けてカレーだけってのはな」

何か追加で一品欲しいところだ。

「……………あ、そうだ」

タッパーに入れて保存しておいた白米をレンジに入れたところで、先週実家から冬野菜が大量に送られてきた事を思い出した。

「冬野菜サラダでも作るかな」

サラダならただ野菜を刻んで盛り付けるだけだから簡単に作れる。そうと決めたら即実行。段ボールに入れたままにして置いてあるベランダに向かう。これは余りにも野菜が多過ぎて冷蔵庫に入らなかったのでもうしているのだが、時々曇りが降ってくるような今日の頃、天然の冷蔵庫と化したあのベランダに置いておいて野菜が痛むことはまず無いだろう。

正直言って再び外の冷気を感じるのはゴメンこうむりたかったが、ベランダの戸を開けない限り俺が冬野菜にたどり着くことは出来ない。ここはひとつ、覚悟を決めるしかない。

「……………よしっ」

覚悟を決め、ベランダの戸をゆっくりと開けて外に出た俺は外の冷気に体が震えて、そしてベランダにあるものを見て……………思想が停止した。

べつに冬野菜が入った段ボールを見てそうなったわけではない。それとは別の、本来ではありえない様な光景が俺の足元に広がっていたからだ。

人。いや正確には少女が倒れていたからだ。

別に俺に妄想癖があるとか頭のネジがぶっ飛んでるといふ訳では
……ないよね？

「……………イタタタッ！」

ためしに自分の頬を思いっきり抓って見るとやはり痛みを感じた。
タチの悪い夢とかそういうのでは無いらしい。
それに、

「この子って」

意識を失った倒れているその少女に俺は見覚えがあった。それは
もう嫌というほどに。

幼い顔立ち、水兵の様な白いセーラー服、手に持った旧式の機関
銃、足に付けた妙な飛行機械、そして何故かパンツ　らしきモノ
丸出しのその姿はつい数時間前、『敵』からの攻撃から俺を守
ってくれた『ウィッチ』と名乗る謎の少女、宮藤芳佳のものだった。

「……………なんでね」

あまりの事に某運命ゲームの主人公の台詞を言ってしまった俺は
悪くないと思う。

東間 Side

今の時間はほぼ無人に等しい、基地内の喫煙室。そんなところで

俺こと、国防空軍二等空佐東間滋アスマンゲルはのんびりと煙草を吸っていた。

「……………はあ」

否。正確には煙草を吸いながら溜息をついていた。

「全く臣崎の奴。どうしてこうも俺の頭痛の種を拾ってくるのかね？」

今しがた頭痛薬を飲んだばかりで痛みが抜けていない頭を右手で抱える。

それは基地に帰還した後1人早めに帰宅させた部下、臣崎和人二尉からの電話によるものだった。

あの戦闘の上級指揮官であり、また部隊長として報告書等の雑事に追われていた俺は突然の部下からの電話に別段と驚きはしなかった。……………その内容を聞く前は、だが。

その電話はなんと、現在空軍が血眼になった探している宮藤芳佳を発見したというものだった！

しかも、自宅の官舎のベランダで倒れているのを発見したと聞いて俺は身体力が抜けていく思いだった。なぜなら捜索隊は、官舎から数キロと離れた宮藤芳佳の落下地点の周りを重点的に捜索していたからだ。道理で見つからなかったわけだ。また幸いにも宮藤芳佳は気絶しているだけで目立った外傷等は無いとこの事らしかった。

俺はすぐにこの事を基地司令の上村空将ウケムラに報告した。上村空将は高卒の二等空士として入隊してから叩き上げで空将まで上り詰めた人物で基地隊員からの信頼は厚かった。

俺はてっきり即自的な身柄の確保を命令されると思っていたが、空将の下した命令は「様子見」との事だった。なんでも彼女が目を

覚まし状況を判断するまでは臣崎に身柄を預けておくという判断らしかつた。といつても見張りは付けるらしく既に警務隊と基地警備隊の一部を官舎の付近に向かわせたらしい。

この命令に反対する幹部もいたが、それは空将が「女の子相手に強引すぎる手段を使うのは軍人として以前に男としていかなだろう」と、説得だか何だかわからない話し合いでけりがついた。

「とにかくだ。その宮藤とかいう嬢ちゃんが『敵』の撃墜に協力してくれたんなら、俺達の敵である可能性は低い。それにもしその子が敵だったとしてもウチの部隊を送るんだから心配する必要はないさ」

相変わらず、何の根拠もない楽天発想だが、暗に自分の部下を信頼している事は良く分つた。これも基地隊員達が空将に絶大な信頼を置く理由の一つなのだが。

その事を電話で臣崎に伝えると、まるでこの世の終わりの様な声で呻いていた。まあある意味でいろんな責任が自分の肩にのしかかっているようなもんだからな。アイツの上官である俺も人の事を言えたもんじゃないが、哀れ以外の何物でもないな。

「さてさて。これからどうなる事やら……………」

煙草を啜え、肺一杯にニコチンとタールを吸い込んだ俺の呟きは、そのまま吐き出した煙と共に暗闇に消えていった。

第三話（後書き）

相変わらずの駄文で申し訳ありません。自分なりに頑張っているつもりなんですけどもうまくいきません。

ご意見・ご感想等お待ちしております。ではまた！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4954y/>

ストライクウィッチーズ 奇跡の交差

2011年12月17日01時48分発行